

子どもたちの未来を応援し 東北のこれからを、共につくる

Efforts of Enterprises × The future of Tohoku

ロート製薬株式会社

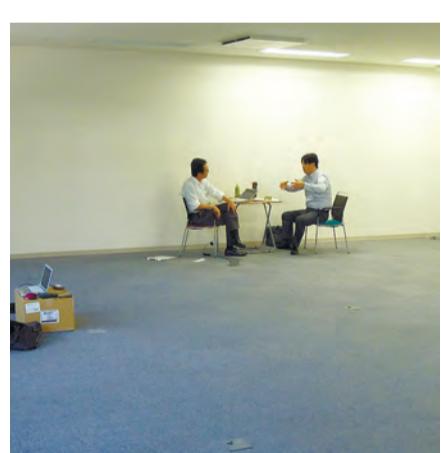


①宮城県柴田高校で実施した「薬育」の様子 ②青森県内で開催した目の健康啓発イベント ③釜石市の特産品「甲子柿」を使った商品のPRイベントを応援 ④「みちのく未来基金」の第8期生の集い(2019年3月)。受賞学生、サポーター、スタッフの交流が行われています ⑤「みちのく未来基金」設立の記者会見。左から、カゴメの喜岡会長、ロート製薬の山田会長兼CEO、カルビーの松本会長(いずれも2011年9月当時)

未曾有の大災害に見舞われた東北の被災地に、私たちができるは何だろう。大阪市に本社を置くロート製薬会長の山田邦雄氏は、阪神淡路大震災の際、子どもたちに十分な支援ができなかつたという自責の念から、「被災した子どもたちを支援したい」という強い思いがありました。東日本大震災発生後、同社は「復興支援室」を迅速に立ち上げ、社内で選ばれたメンバー6人が強いてはわからぬ。まずは現地で選ばれたメンバー6人が2011年3月末に被災地に入りました。「どんな支援が必要とされているのかは、遠くにいるはわからない。まずは現地に入ってつかもう。そこで、復興支援室のメンバーは早く、商品の数々を薬箱に入れて学校に届ける活動を始めました。

福島第一原子力発電所事故の影響で、子どもたちが外遊びできないということを知った宮内閣官房のスタッフが、いわき市を中心にドッグストアなどを展開するくすりのマルトと協力して、イベントを企画。栃木県にある観光牧場などへ子どもたちを招待し、戸外で自由に遊べる機会をつくりました。また、青森市に本社がある丸大サクラヰ薬局と一緒に、健康に関するセミナー・やイベントを開催。岩手県釜石市では昔から地元で食べられてきた「甲子柿」

未曾有の大災害に見舞われた東北の被災地に、私たちができるは何だろう。大阪市に本社を置くロート製薬会長の山田邦雄氏は、阪神淡路大震災の際、子どもたちに十分な支援ができなかつたとい



(左)2012年6月に4人で開設した当時の仙台営業所の様子。(右)現在、仙台営業所のメンバー9名を中心に東北で活動しています

さまざまなもの難を乗り越えてきた子どもたちへの支援として、11年10月に設立されたのが「みちのく未来基金」※です。カゴメ、カルビーと共に立ち上げたこの基金は、震災児に対する高校卒業後の進学支援を柱とする返済不要の奨学金制度。震災当時お腹の中に入った子どもが卒業するまでの長期にわたる活動を表明し、子どもたちの夢を応援している。東北でドラッグストアや調剤薬局を開設する薬王堂は、「みちのく未来基金」に寄付するほか、店頭で基金に関する情報を発信。子どもたちを支援する輪が広がっています。※みちのく未来基金の新規寄付の受け付けは終了しています。

「みちのく未来基金」で広がる支援の輪

「NEVER SAY NEVER」は、「どんな困難にもめげず常識のを超えてチャレンジ続ける」というロート製薬のDNAを表しています。現場に飛び込み、「お客様」が困っていることに向き合い解決を目指す。企業のチカラが、これらの活動に發揮されています。



設立の経緯や伝えたい思いなどがまとめられた冊子「みちのく未来基金設立の記録」

<http://michinoku-mirai.org/image/SETSURITSUNOKIROKU.pdf>



NEVER SAY NEVER
ロート製薬

ロート製薬株式会社
<https://www.rohto.co.jp/>

ロート製薬は震災後、迅速に「復興支援室」を立ち上げ

活動を続けてきました。震災遺児の進学を支援する「みちのく未来基金」は、子どもたちの夢を応援。2012年には仙台営業所を開設し、東北の企業と共に地域の人々の健康づくりをサポート。地域と手を携え、東北の未来創造を目指しています。

阪神淡路大震災の経験から強まつた
東北の子どもたちへの思い

仙台営業所を開設
「薬育」などの取り組みも